

花川病院

薬剤師 室内 友希

功 績 室内主任はポリファーマシー（多剤服用）削減に対して、薬剤師から医師へ提案できる仕組みを新しく構築した。結果として、薬剤調整加算の算定件数が増加し、さらに減薬に伴う削減金額は年間48万円となった。また、健育会全体のミッションである「後発品から先発品への切り替え」に関しても主体的に行動し、年間107件の変更を達成した。

ポリファーマシーへの介入、先発品の切り替えにより質の高い医療を提供できる環境を整えたことが功績である。

推 薦 者 薬局長 長谷川 裕之

推 薦 理 由 室内主任は日々の薬剤師業務において、周囲を良く見ながら仕事に取り組んでおり、状況把握に長けているという長所があります。今回もポリファーマシー削減に向けて薬局として何ができるかを冷静に判断し対策を提案してくれました。ポリファーマシー削減や先発品への切り替えを通して患者様に質の高い医療を提供したいと日々奮闘している姿が今回推薦した理由です。

内 容

室内主任は、ポリファーマシー削減に対して、持参薬鑑別時に医師に提出する「持参薬チェックシート」枠内に薬剤師が医師に向けて減薬が可能な薬剤について提案する項目を新たに作成した。（別紙参照）

これにより患者入院時に、効果が重複している薬剤や薬剤師の視点で不要と考えられる薬剤の提案を医師に行うことが可能となった。この取り組みに加え、各医師のポリファーマシーに関する理解と浸透が深まった結果、2024年度は薬剤調整加算の算定件数が28件となり、前年実績を上回ることができた。減薬による削減金額は年間で合計48万円となり、コスト削減にも大いに繋がっている。

また、室内主任はポリファーマシーの介入と平行して健育会全体でのミッションでもある「後発品から先発品への切り替え」に対しても薬局内で中心となり取り組んだ。当院は後発品の割合が多い中、流通状況を的確に判断し先発品に変更可能な薬品の洗い出しを行った。実際の切り替えのタイミングでは調剤過誤が生じぬよう薬局内で情報共有をしっかりと行うなど細心の注意を払い、かつ後発品の廃棄を最小限に抑えることができるようなタイミングを見定め、各医師へ変更依頼を行った。結果として、後発品から先発品への切り替え件数は年間107件にものぼった。現時点においては、先発品へ変更可能な後発品の約82%が先発品へと切り替わっている状況である。